台大日本語文研究第 7 期
2004 年 12 月，頁 91~110
本文 2004.9.17 收稿，2004.11.10 通過刊登

森鷗外的《舞姬》論
---與《情史》《霍小玉傳》的關係

林 淑丹*

摘 要

森鷗外從小就接受中國古典文學的薰陶，有相當深的中國文學素養。森鷗外的藏書當中，收藏了許多明清小說，其中更有讀後的眉批等等。以回憶年輕時光爲題材的作品《性生活史》中，就曾提及中國明清的才子佳人小說《燕山外史》，及愛情小說《情史》兩部書。本篇論文以《情史》爲著眼點，探討森鷗外早期的留德作品《舞姬》與《情史》的關連性。

從森鷗外在自己的藏書《情史》這部小說所留下的眉批來看，可以了解年輕時代的森鷗外對中國的才子佳人小說十分感興趣，也將其特性反應在自己的作品當中。不同於其他日本的研究學者，森鷗外十分正確地掌握了才子佳人小說的特性。森鷗外把他對中國才子佳人小說的理解反映在《舞姬》這部作品中。《舞姬》雖不能稱爲才子佳人小說，但我們可從《舞姬》中找出部分才子佳人小說的特性。不僅如此，森鷗外還把他自己的小說理論運用在《舞姬》裡，描繪出具「特殊風貌的才子」形象來。此外，對照比較《舞姬》與中國傳奇小說《霍小玉傳》，我們也可以發現《舞姬》與《霍小玉傳》有許多相似的地方，這說明《舞姬》這部作品也同時具有中國傳奇小說的特色。

因此，我們可以說，森鷗外的《舞姬》是部多層次的、具複合特性的小說。

關鍵詞: 森鷗外、《舞姬》、才子佳人小說、《情史》、《霍小玉傳》

臺灣大學學術期刊資料庫

* 私立文藻外語學院日本語文系專任助理教授

Mori Ogai's *Maihime* -----the Relation with Classical Chinese Literature, the *Qingshi* and the *Huoxiaoyu zhuan*

Lin, Shu-dan*

Abstract

In addressing the question of how Ogai utilized the knowledge of Chinese literature, this article examines the relationship between *Maihime* and the *Qingshi* from the view of the Chinese "Caizi jiaren" ideal.

From the notes Ogai made in the margins of *Qingshi*, the Ming-Qing love-story collection, Ogai was interested in the theme of immortal love and in the sharing between an intelligent, handsome man and a well-educated, beautiful lady found in the Chinese "Caizi jiaren" genre. This understanding is reflected in his early novels, *Maihime*. Unlike other Japanese literature researchers, Ogai correctly understood the essence of the Chinese "Caizi jiaren" ideal.

His understanding for the essence was clearly reflected in his early works, *Maihime*. And also from the view of the relation with the Chinese chuanqi story, the *Huoxiaoyu zhuan*, *Maihime* also has the characteristic of the Chinese chuanqi story. Therefore, we can say Ogai's *Maihime* is a complicated and multifaceted work which combines the characteristic of both the Chinese "Caizi jiaren" ideal and the chuanqi story.

Key words: Ogai, *Maihime*, the Chinese "Caizi jiaren" ideal, *Qingshi*, *Huoxiaoyu zhuan*

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor of Japanese Department, Wenzao Ursuline College of Languages

森鷗外『舞姫』論
——『情史』『霍小玉伝』との関連を中心に

林 淑丹*

要　旨

本論文では、若き日を回想した『キタ・セクスアリス』に、明清の「才子佳人小説」『燕山外史』と恋愛小説『情史』の名が出ているのを手がかりに、若き日に書かれた「ドイツ三部作」の『舞姫』へと考察を進めた。若き日の鷗外は、中国の「才子佳人小説」に関心を寄せており、そうした関心を自らの初期の創作にも反映させていることが明らかにできた。従来の研究と異なり、鷗外は本来の中国古典文学における「才子佳人小説」の性質を正確に把握していたことが解明できた。そうした理解が初期の創作『舞姫』に反映されている。『舞姫』には「才子佳人小説」と重なる部分が多々あると認められる。それにとどまらず、鷗外は同時に、自らの小説論で主張したように、『舞姫』において「特殊の面目ある各箇人の才子」を作り出した。しかし、『舞姫』が即ち「才子佳人小説」そのものであるとは言えない。だが、唐代の伝奇小説『霍小玉伝』との関連から見れば、『舞姫』は中国の伝奇小説の性格をも併せ持っていると考えられる。このように、『舞姫』は重層的で複合的な性格を持つ作品であると言える。

キーワード：森鷗外、『舞姫』、才子佳人小説、『情史』、『霍小玉伝』

臺灣大學學術期刊資料庫

* 私立文藻外国語学院　日本語学科専任助理教授

森鷗外『舞姫』論
――『情史』『霍小玉伝』との関連を中心に

林 淑丹

一、はじめに

森鷗外は幼い頃から、四書五経、左国史漢の素読に通うなど、幼い時から中国文学に親しんでいた。だが鷗外文学と中国文学の関連は、鷗外研究史の中でも最も手薄な分野と言える。東京大学附属図書館蔵「鷗外文庫」には、明清の恋愛小説が多く所蔵されており、鷗外による書き込みが蔵書の各所に散在している。鷗外がこれらに大きな関心を抱いていたことを窺わせる。それらの書き込みと作品の世界がどう関わっているのか、関心を引く。鷗外の自伝的要素の濃い『キタ・セクスアリス』(『昴』第七号、一九〇七年九月）の中に中国の明清小説への言及があり、伝奇小説の『剪燈余話』、才子佳人小説の『燕山外史』と恋愛小説集の『情史』が取り上げられている。「才子佳人小説」とは、普通の恋愛小説と違って、優れた文才を持っている美男子と、聡明で文才のある美人との恋愛小説である。このような「才子佳人小説」の特色は次の三点に集約できる[1]。

第一に、「才子佳人」の形象である。才子と佳人は共に容貌だけではなく、優れた文才も求められる。ここでの文才は詩文の才を指していて、教養のあることを意味している。特に佳人がよく焦点づけられ、その資質が詳細に描かれている。絶世の美貌だけではなく、文才によって才子と精神的に交流する能力を揃えていなければならない。

---

[1]曹碧松「才子佳人小説的進歩意義和消極的意義」(『明清小説論叢１』春風文芸出版社、一九八四年五月、四三頁）や程毅中「略談才子佳人小説的歴史発展」(『明清小説論叢１』春風文芸出版社、一九八四年五月、三四頁)、陶応昌「容貌、才情与心霊―明清才子佳人小説中女性形象的審美意識」(『雲南民族学院学報』第十五期、一九八七年六月、六六頁）と胡萬川『話本與才子佳人小説之研究』(大安出版社、一九九四年二月、二一四頁）などを参照。

第二は、才子と佳人が「才」によって互いに哀れみ、愛を確かめ、「才」によって情が生まれるという点である。特に詩のやり取りは「才子佳人小説」で一つの大きなモチーフである。互いに詩によって愛を確かめる重要な特徴があり、詩文を通して精神的な交流を深める。また、二人の恋しい思いを書いた詩や手紙は、殆ど侍女や第三者を通して伝えられることになる。

第三に、出会いの設定は一目惚れのパターンが多い。例えば、元の時代の有名な戯曲『西廂記』の第一章に書かれた男女の出会いのように、才子が佳人の「驚艶」（神仙に比されるほど驚嘆すべき絶世の美しさ）に魅せられるというものである。筋の展開は情の哀切激越が特色で、二人の境遇は波乱万丈で、さまざまな災難を経て、ようやく結ばれ、ハッピーエンドで終わる。そこで男女の純粋で揺るがない愛を示す。

こうした特有の性格を持っている小説は、先行研究でよく誤解される傾向がある。後に詳しく述べるが、特に佳人像について、美貌でさえあれば「佳人」だと思い勝ちである。従って、ここで綿密に定義し、その特色を強調し、明確にしたい。

こうした特色を持つ小説を、鷗外はどう理解し、またその理解を作品にどう生かしたのか、鷗外による書き込みをふまえて作品の世界との関連について考察を進めたい。具体的には本稿では、まず若き日に書かれた「ドイツ三部作」の『舞姫』（『国民之友』第六巻第六九号、一八九〇年一月）へと考察を進めたいと思う。

二、鷗外の『情史』への書き込みについて

鷗外の自伝的要素の濃い『キタ・セクスアリス』には中国の小説に言及した、次のような一節が見られる。「僕」の十五歳の秋のことである。

> 戀愛といふものの美しい夢は、斷えず意識の奥の方に潜んでゐる。初て梅暦を又借をして讀んだ頃から後、漢學者の友達が出来て、剪燈餘話を讀む。燕山外史を讀む。情史を讀む。かうい

臺灣大學學術期刊資料庫

ふ本に書いてある、青年男女の naively な戀愛がひどく羨ましい、妬ましい。そして自分が美男に生れて來なかつた為めに、この美しいものが手の届かない理想になつてゐるといふことを感じて、頭の奥には苦痛の絶える隙がない。(『鷗外全集』「第五巻」、一九七二年三月、岩波書店、一四一頁、以下同、傍点引用者)

ここで、中国の明の伝奇小説『剪燈余話』、清の才子佳人小説『燕山外史』と、明の恋愛小説『情史』(『情史類略』とも言う)が取り上げられている。鷗外の旧蔵本である『情史類略』と『剪燈余話』の中には圏点、傍点などが多く見られ、特に『情史』には鷗外による書き込みがいくつか残されている。それに対して、『燕山外史』には傍点や書き込みが一つも見られない。若き日の鷗外はこうした明清の恋愛小説をどのように読んでいたのだろうか。まず、鷗外による書き入れのある『情史』を考察し、それと鷗外の創作との関連について検証するのが、この論文の一つの眼目である。

「鷗外文庫」の『情史類略』の版本は馮猶龍先生原本、詹詹外史評輯、立本堂蔵板で、恋愛に関する歴代の物語を記した小説である。全二十四巻で、情貞類(巻一)、情縁類(巻二)、情私類(巻三)、情俠類(巻四)、情豪類(巻五)、情愛類(巻六)、情痴類(巻七)、情感類(巻八)、情幻類(巻九)、情霊類(巻十)、情化類(巻十一)、情媒類(巻十二)、情憾類(巻十三)、情仇類(巻十四)、情芽類(巻十五)、情報類(巻十六)、情穢類(巻十七)、情累類(巻十八)、情疑類(巻十九)、情鬼類(巻二十)、情妖類(巻二十一)、情外類(巻二十二)、情通類(巻二十三)及び情蹟類(巻二十四)のように分類して編纂されている。『情史』には鷗外と関わりの深い小説集で、鷗外の作品『雁』(籾山書店、一九一五年五月)で言及した「小青伝」が巻十四の情仇類に入っている。また、『魚玄機』の原典の一つとされる『三水小牘』に収録されている魚玄機の話が、巻十八の情累類にも見られる。

『情史』は恋愛小説集であるが、「才子佳人小説」の話型も収め

臺灣大學學術期刊資料庫

られている。序文から全二十四巻の本文に、鷗外の朱による傍点や圏点、書き入れが散見される。傍点や圏点だけが施されている作品もあるが、特に書き入れのある作品に注目すれば、それらの作品の殆どが才子佳人の話型だという点が特徴的である。例えば、「阮華」（巻三）と「朱淑貞」（巻十三）の話が挙げられる。

巻三「阮華」の編に鷗外の書き込みが見られる。「阮華」は才子の阮華と佳人の玉蘭の恋愛小説である。阮華は詩文の才に優れた美男子で、特に琴や簫、笛が得意である。ある日友人の集まりで得意の簫を吹き、近くにいる名門の娘、玉蘭がその素晴らしい簫の音に酔う。その憧れの気持ちを書いた詩を侍女に頼み、阮華に伝える。阮華は玉蘭の絶世の美貌と品の良さに一目惚れし、その後玉蘭を忘れられず、ついに病気に罹ってしまう。阮華の友人が、玉蘭の家を出入りしているある尼に、二人を会わせるようにと頼む。尼は計画して尼の庵まで二人に来てもらい、会わせた。しかし、残念なことに阮華が玉蘭を深く思い、すでに重病になっていたため、玉蘭と再会できる喜びを抑えきれず、性的情熱が高まり、楽しい一時を過ごした途端、急死してしまう。玉蘭は悲しみのあまり、阮華の子を産み、二度と他の男性と付き合わず、一生質素な生活を送ったという筋である。

ここの尼は二人を助けたように見えるが、実は阮華を死にまで追いやった犯人である[2]。尼の計画で二人がようやく会える箇所の欄外に、鷗外は「稚生之心一死応、勝乎不協而生矣。然則催命鬼來足為憾也」（書生の心は死を以って応えている。意に添わないまま生きていくよりましである。しかし、命を奪う者が来て、実に残念なことである。林訳）（「巻三」、三六頁、句読点引用者）と書き入れている。鷗外の文章を直訳すると、やや意味が取りにくいが、要するに、亡くなってしまうほどの阮華の玉蘭に対する思いの深さと、再会の喜びを表している。彼女に会えないまま生きるよりましである。しか

[2]昔の伝説の中に、尼が同じような策略を使い、青年男女を会わせ、男性を殺害してしまう話がある。また『夷堅志』にも似たような話が書かれている。

臺灣大學學術期刊資料庫

し、命まで奪われてしまうのは実に遺憾なことだという意味であろう。極度の喜びで亡くなることは普通ではないが、阮華は亡くなってしまうほど玉蘭との再会を楽しんでいたことを表したのであろう。この評から、鷗外の才子佳人の一途な気持ちや変わらぬ愛、そして二人が結ばれなかった悲しみへの遺憾な気持ちが読み取られる。

また、巻十三の「朱淑貞」に見られる鷗外の書き込みは、佳人朱淑貞の詠んだ漢詩の横である。朱淑貞は小さい時から聡明で、衆に抜きんでた才能を持っている。しかし、夫が愚かで不細工なので、朱淑貞はその憂鬱な気持ちをすべて詩に託している。「今年元夜時、月與燈依舊、不見去年人、泪濕春衫袖」（今年の十五夜も、月と燈は昔のままであるが、去年に会った人はすでにいなくて、悲しい涙が袖を濡らした。林訳）という詩を詠んだ。側に鷗外による「情致纏綿」（纏綿とする深い情愛）の書き込みが残っている。ここでの去年に会った人とは愛人のことを指しているであろう。鷗外は、朱淑貞の深くて情熱的な恋愛感情に感動して「情致纏綿」と書き入れたのであろう。

このように、鷗外の『情史』への書き込みから、鷗外はとりわけ「才子佳人小説」に注目したことが分かる。「才子佳人小説」でも特に関心があったのは、文才に優れた美男美女の間に生まれる純情で献身的な愛情表現と、恋に対して変わらない、忠実な態度を示したところだと理解できる。『キタ・セクスアリス』での「僕」の感想と照らし合わせて、若き日の鷗外は才子佳人の深くて情熱的で、哀切激越した恋愛感情に惹かれ、それを男女恋愛の理想と考えたのではないか。

三、『舞姫』と「才子佳人小説」

若き日の鷗外のこのような関心は、具体的な創作にどのように反映されているだろうか。初期の作品に着目して検討してみたい。

繰り返しになるが、「才子佳人小説」の特色として、第一に、才子と佳人は容貌だけでなく、優れた文才も求められる。特に佳人の形

臺灣大學學術期刊資料庫

象は絶世の美貌だけでなく、聡明で文才のある美人でなければならない。第二に、互いに詩によって愛を確かめ、詩文を通して精神的な交流を求める特徴がある。第三に、出会いの設定は一目惚れのパターンが多い。情の哀切激越が特色で、筋の展開は波乱万丈であり、そこに男女の揺るがない愛が示される。

このような観点から、『舞姫』に「才子佳人小説」的な要素が見出せるかどうか、検討してみよう。才子像に着目すれば、大田豊太郎がそれに当てはまると考えられる。豊太郎は幼い頃から優等生である。「舊藩の學館にありし日も、東京に出でゝ預備黌に通ひしときも、大學法學部に入りし後も、大田豐太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりし」(『鷗外全集』「第一巻」、四二六頁)とあるように、小さい頃から卓越した能力を見せている。洋行の官命を受けるほど、優れた学識と才能を持っている才子と言える。しかし、佳人の造型から考えれば、エリスは美貌であるとはいえ、聡明で優れた文才を持つ、教養のある女性とは考え難い。エリスは「父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五の時舞の師のつのりに應じて、この耻づかしき業を教へられ」(四三四頁)たという。初めて豊太郎を家に連れて帰った時、「少女は少し訛りたる言葉にて云ふ」(四三二頁)と書かれている。豊太郎と交際してから、「余が借しつる書を讀みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ」(四三四頁)というように、外国人の豊太郎に発音や文字などを直されるまで、正規の教育を受ける機会もなかった。踊ることはできるが、「耻づかしき業」なので、学識のような教養とは異なる。文才や教養があることは佳人として不可欠な条件なので、そういう意味で、エリスは佳人だと言い難い。つまり、エリスは中国の「才子佳人小説」での高い教養を持つ佳人のあるべき姿とかなりずれている。厳密に言えば、佳人不在の小説は「才子佳人小説」だと考えにくく、『舞姫』は即ち「才子佳人小説」だとは言い難い。

平岡敏夫氏は『舞姫』と「才子佳人小説」の『燕山外史』との関

臺灣大學學術期刊資料庫

連を論じ、豊太郎とエリスとの出会いが「才子佳人の奇遇」のパターンに当てはまり、エリスを「佳人」として見ている[3]。『燕山外史』は、清の陳球の作で、竇繩祖とその妻と、竇繩祖の愛人である李愛姑の間の葛藤を物語る才子佳人小説である。『キタ・セクスアリス』にもその名が出ている。因みに「鷗外文庫」に収められているのは、清の陳球の撰、項震新などの校正で、光緒二十七年（一九〇一）上海申昌書局石印本の版である。鷗外による傍点や書き込みは見えない。平岡氏の論文では、「才子佳人の奇遇」の語が繰り返し使われており、論文のサブタイトルは「才子佳人の奇遇を中心として」となっている。しかし、この語に二つの問題がある。第一に、果たして『舞姫』は「才子佳人小説」と言えるのか。前述したように、エリスは聡明で教養のある「佳人」とは言い難い。この点に『舞姫』と中国の「才子佳人小説」の話型とのずれがある。第二の問題は、「奇遇」という表現である。平岡氏は男女の出会いの場面について、「雨宿りの宝生（ママ）が愛姑を見出すという才子佳人の奇遇となっている点で、古寺の扉の前というちがいがあっても、「舞姫」と同じ才子佳人の直接の奇遇なのである」[4]と述べている。しかし、「奇遇」の概念はもともと伝奇小説から来たもので、ある男性が天女に出会って恋に落ちたり、狐や龍から化けた女性と恋愛したりするような、普通では考えられない不思議で珍しい体験のことを指している[5]。前述したように、「才子佳人小説」での男女の出会いは、殆ど互いの比類のない美しい容姿と卓越した文才に惹かれて一目惚れしてしまうという類型を特色とする。それは「才子佳人小説」の一つの大きな、且つ重要な特徴である。「才子佳人小説」の場合は、「奇遇」というより、

[3] 平岡敏夫『森鷗外　不遇への共感』（おうふう、二〇〇〇年四月、七二頁）
[4] 『燕山外史』とその原典とされる「竇生本伝」の主人公の名前は、「竇繩祖」であり、「竇生」と略称されている。しかし、氏は論文中最初から最後まで「竇生」を「宝生」に改め、疑問に思われる。「竇」と「寶」とは明らかに異なる文字である。
[5] 李宗為『唐人伝奇』（中華書局、一九八五年十一月、八九頁）や、呉季琪「唐人伝奇之創作方法及特色」（『古今芸文』二七巻二期、二〇〇一年二月、三九頁）などを参照。

臺灣人文學術期刊資料庫

「偶然に出会う」の意味合いが強く、「偶然にも素晴らしい出会いがある」、あるいは、才子が「偶然天女に比されるほどの絶世の美人に出会って一目惚れする」場合が多い。『燕山外史』の竇生と愛姑の出会いは、まさに才子が佳人に出会う典型であり、「奇遇」と考えにくい。一方、『舞姫』の豊太郎とエリスの出会いは、めったにないという不思議な「奇遇」とは異なるが、才子佳人が一目惚れするような出会いのパターンとも違う。

また、重松泰雄氏も『舞姫』を「才子佳人の物語」を前提に考えている[6]。重松氏は、鷗外初期の小説論「現代諸家の小説論を読む」の一節を引用し、「『舞姫』という作品は、まさに『心理的観察に依て始めて描写し得べき特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語だった」と述べている。「現代諸家の小説論を読む」(『柵草紙』第二号、一八八九年十一月)は、鷗外の小説論の中で最もまとまったもので、諸家の論に問題提起をしながら、鷗外自身の小説論を詳しく述べている。しかし、まず、氏のいう「『特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語」(傍点引用者)の語に留意したい。「抽象的理想主義」派の創作は実世界に反するがために、人物像が類型的になってしまうことを鷗外はこの小説論で批判している。「故に讀むものは巻中に於て、才子にも佳人にも逢ふことあるべしと雖も、その才子と佳人とは皆な是れ各一想の擬人法にて得たる理想的才子佳人にして、心理的観察に依て始めて描写し得べき、特殊の面目ある各箇人の才子佳人にあらず」(傍点引用者)という。鷗外が「抽象的理想主義」派の創作を批判したのは、人物像のパターン化という点である。つまり、ここで鷗外の指摘した「特殊の面目ある各箇人」のものは、作中人物像のことを指しているのであって、物語の全体や筋の展開までは言及していない。それから、氏は「『特殊の面目ある各箇人の才子佳人』の物語」と述べているが、特殊であっても最小限の「佳人」の条件を満たしていなければ、『舞姫』そのものは「才子佳人小説」

[6] 重松泰雄『鷗外残照』(おうふう、二〇〇一年九月、四七頁)

臺灣大學學術期刊資料庫

だとは言い難い。

「才子佳人小説」という文学的カテゴリーはもともと中国文学から来たものである。このように、先行研究においては、「才子佳人」の概念規定が日本的な理解によってなされている。特に「佳人」の造型に関しては、字面によるそれにとどまっている。しかし、ここまでの記述で明らかなように、鷗外は本来の中国古典文学における「才子佳人小説」の性質を正確に把握していた。

では、あらためて、才子の豊太郎の造型はどのような「特殊の面目」を持っているのか、この点に着目して、豊太郎の才子像を考え直したい。

昔中国における書生の典型は、殆ど地方の出身で親孝行で、家族の期待と功名のため、貧困な生活や逆境を乗り越えて勉学し、科挙に受かり高官になる道を歩むのである。『舞姫』の豊太郎も地方の出身で且つ親孝行で、立身出世のために勤勉に学問の道を進み、優れた学識、才能を見せている。「余は幼き比より嚴しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、學問の荒み衰ふることなく、舊藩の學館にありし日も、東京に出でゝ預備黌に通ひしときも、大學法學部に入りし後も、大田豐太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし」（四二六頁）とあるように、典型的な中国の書生像が提示されている。しかし、「余が幼き頃より長者の教を守りて、學の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一條にたどりしのみ」（四二九頁）というように、豊太郎はドイツへ行き、西洋の文化に触れてから、今まで勉学してきたものやこれからの青雲の道に疑問を持ち始めた。「余は父の遺言を守り、母の教えに從ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず學びし時より、官長の善き働き手を得たりと奬ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由

臺灣大學藝術期刊資料庫

なる大學の風に當りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり」（四二八頁）という。立身出世の道は普通の書生にとっては夢であり、当たり前の目標であるが、豊太郎にとっては不確定な道となり、背負わなければならない重荷となったのである。豊太郎はこの点において、中国の才子と大きな違いがある。

このように、人物造型だけからすれば、『舞姫』は即ち「才子佳人小説」とは言い難いが、そうした要素の入っている作品だとは考えられる。鷗外が「才子佳人小説」で注目した、恋愛に対する一途さや、男女の情の哀切激越と純情で情熱的な感情表現という点が『舞姫』にも見られるからである。エリスは豊太郎に対して自分のすべてを捧げるような深い恋愛感情を持ち、彼女の恋愛感情の表現は一途で情熱的である。エリスは、予想せず豊太郎に騙され捨てられた時、突然の衝撃と裏切られる悲痛で発狂してしまう。「我豐太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」（四四六頁）と、ひどく傷付き悲しむ。発狂してしまうほどエリスは豊太郎に対して深い恋愛感情を持った。エリスは豊太郎に対して純情で情熱的で、一途であるという特質が見られる。豊太郎に対するエリスの純真な深い愛情の描写は、鷗外が「才子佳人小説」で感心した女主人公の「情致纏綿」（纏綿とする深い情愛）の表現に通ずると考えられる。一方、豊太郎にも深い恋愛感情を持つ側面が見られ、作品全体にエリスと結ばれぬ彼の後悔と懊悩が漂っている。善良で純情なエリスを裏切ってしまうせつなさと懺悔の気持ちや断腸の思いが繰り返され、心の葛藤が鮮明に描かれている。

このように、豊太郎の才子像の一面を含め、男女の純情で相思相愛の深い恋愛感情の表現に着目すれば、確かに『舞姫』は「才子佳人小説」と重なる部分があると認められる。鷗外は自らの小説論で、「特殊の面目ある各箇人」の人物像を作るべきだと主張していた。それと対応したように、創作においてもパターン化された理想的な

臺灣大學學術期刊資料庫

才子ではなく、「各箇人」の才子を作り出そうとしたのではないかと思われる。

四、『舞姫』と中国の伝奇小説『霍小玉伝』

佐藤春夫は「鷗外の初期のロマンティシズムのなかには意識的にか無意識的にか知らないが、相応に伝奇小説風のものが雑つてゐる」と示唆的な観点を提示している[7]。『舞姫』は「才子佳人小説」の要素の入った作品だと言えるが、同時に中国の伝奇小説の性格をも見出すことができるだろうか。氏は『舞姫』について、「立身出世を志し青雲を夢みている諸生と名妓との情事を記した「何某伝」などと女名前を題とした一類は唐代小説の典型的な一系列をなすもので、『舞姫』はこの類の一変形に属するものである」と述べている。しかし、作品が具体的にどう中国の伝奇小説と関わっているのか、佐藤春夫はこれ以上詳しく論じていない。

ここで佐藤春夫の言う「何某伝」とは、女性名一般を例えているのであろう。女性名を題としたものは唐代の伝奇小説に多く収録されている。確かに、唐代小説の典型は立身出世の書生と名妓との情事をテーマとして書かれたものだと言える。しかし、そうした典型は『舞姫』とどう関わっているのか。

中国の伝奇小説について、その内容によって三種類に分けられる[8]。第一に武勇伝、豪傑類で、第二に恋物語類で、第三に神仙鬼怪類である。『舞姫』や『うたかたの記』と関連あるのは第二の恋物語類だと考えられる。伝奇小説での女主人公は狐や龍の化身だったり、妓女だったりして「佳人」の形象と異なる。唐代の恋物語類では才子と妓女との恋愛や艶異談などの題材がよく取り上げられる。その中で、才子は妓女と身分が違うため、二人は結ばれなかった話もあれば、最後にハッピーエンドで終わるものもある。唐代という時代

[7] 佐藤春夫「森鷗外のロマンティシズム」(『群像』一九四九年九月、一頁)
[8] 胡雲翼編著『増訂本中国文学史』(三民書局、一九七九年十月、一五二頁)

臺灣大學學術期刊資料庫

に絞れば、最も『舞姫』と類似した伝奇小説は『霍小玉伝』（蒋防）の「痴情女と薄情男」の類型だと言えよう。「痴情」は日本語で色情に迷う心、という否定的な意味があるが、中国語では、盲目的に深い恋愛感情を持ち、一途であることを指している。「痴情女」という表現を本論文では中国語の意味で使用する。

『霍小玉伝』は「鷗外文庫」に収められているし、『情史』「情報類」（巻十六）にも「李益」という編名で収録されている。しかし、両方とも鷗外による書き込みが見られない。この小説は蒋防の作で、唐代の小説で才子と妓女の悲恋を描く物語として最も代表的なものだと考えられるという[9]。二十歳の詩人李益が科挙の試験で進士（首席）に合格し、長安で官位を授けられるのを待っていた時、庶民出身で、貧困のため娼妓になった霍小玉の美貌に惹かれた。二人は一緒になったが、二年後、李益は霍小玉を離れ、鄭県の主簿になったのち、母の命令に従って霍小玉を捨てて他の名門の娘と結婚した。李益の心がすっかり変わってしまったことを知った霍小玉は、憂鬱が深まり重病になってしまい、とうとう亡くなってしまった。亡くなる前に、李益をひどく怨み、死んでからも復讐すると言ったためか、李益はその後三回も結婚したけれども、最後まで幸せになれなかったという話である。

『霍小玉伝』は中国の小説で初めて「痴情女と薄情男」を題材とした作品だと評されている[10]。おとなしい霍小玉は遊廓の世界に入ってまだ経験が浅く、少女の純潔な愛をすべて文才のある李益に捧げた。霍小玉は庶民の身分で、これから高官になる李益とつりあわないと思ったが、李益の愛の誓いを信じきった霍小玉は、李益が鄭県へ移転した後でも、ずっと心が変わらなかった。李益の消息を得るため、全財産を使い果たしてしまったが、結局李益に騙されて捨てられる運命にあった。善良で情愛が深く感じやすい、はかない「痴

[9] 呉志達『唐人伝奇』（群玉堂出版社、一九九一年十一月、五三頁）
[10] 李宗為『唐人伝奇』（中華書局、一九八五年十一月、七三頁）

臺灣大學學術期刊資料庫

情女」の造型が鮮明に描かれている。

一方、鷗外『舞姫』の世界もそうした「痴情女と薄情男」の枠に入ると考えられるのではないか。エリスは妓女ではないけれども、舞姫としての身の上は妓女と同じくはかない。「詩人ハツクレンデルが當世の奴隷といひし如く、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋がれ、晝の温習、夜の舞臺と緊しく使はれ」（四三四頁）ているという。また、普通の舞姫はついに身を売ってしまうのであるが、エリスは純潔で貞操を守っていた。「彼等の仲間にて、賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふなる。エリスがこれを逭れしは、おとなしき性質と、剛氣ある父の守護とに依りてなり」（四三四頁）とあるように、エリスはおとなしい性質をもっていた。エリスの善良でおとなしい造型は、伝奇小説の女主人公で霍小玉と最も類似していると考えられる。

エリスは、「善き人」の豊太郎に予想せずに騙され捨てられた時、突然の衝撃でひどく傷付き悲しむあまりに発狂してしまうことによって、自分のすべてを捧げる深い愛情を見せたと言える。このように、エリスは霍小玉と同じく純情であったうえ、ともに騙されて捨てられる悲劇的な運命にある「痴情女」であると理解できる。

「痴情」的な女性像に対して薄情な才人の形象はどうであろうか。『霍小玉伝』で優れた文才をもった李益は、最初から最後まで冷血で無情だったわけではない。しかし、霍小玉に惹かれたのは彼女の美貌だけである。身分の低い霍小玉は進士の李益とつりあわないと思い、八年間一緒に生活してから別れようと彼に言った時、李益はひどく感動し、思わず泣いてしまい、絶対に裏切らないと誓った。名門の娘と結婚する時も迷ったが、母の命令に背くわけにはいかないので、結局士族同士の婚姻制度の下で霍小玉を諦めた。霍小玉がそのため苦しみ重病になったことを知ってから、恥かしく思い彼女を避けていた。このように、李益は優れた文才をもっていながら、弱気で薄情的な人物像が鮮やかに浮かび上がる。

一方、『舞姫』の豊太郎は、結果的にエリスを裏切って帰国し立身

臺灣大學學術期刊資料庫

出世の道を歩んだわけなので、エリスの視点からすれば、豊太郎は「薄情」な人となる。その意味で豊太郎は李益と同じく優れた文人でありながら、恋愛においては「薄情男」であると考えられる。

このように、『舞姫』は伝奇小説の「痴情女と薄情男」の枠組みからでも考えられるのであろう。佐藤春夫は『舞姫』の伝奇的な要素を指摘したが、作品世界との関わりについては具体的に論じていなかった。『舞姫』には伝奇小説のような教訓的、因果応報的な要素が見られない[11]。登場人物は、伝奇小説のように普通の人よりはるかに優れていたり、不思議で変わっている性質を持っていたり、常軌を逸する行動を取ったり、珍しい遭遇があったりすることはない。しかし、多くの伝奇小説の中でも特に『霍小玉伝』の「痴情女と薄情男」の類型や、書生と身分の低い女性という人物の設定や筋の展開などに、『舞姫』の世界は最も近く、重なるところが多いと認められるのであろう。

以上、『舞姫』と中国の小説との関連を見てきた。『舞姫』そのものは「才子佳人小説」だとは言えないが、豊太郎の才子像を含め、『舞姫』は「才子佳人小説」と重なる部分があると認められる。それにとどまらず、自らの小説論で主張したように、「特殊の面目ある各箇人の才子」を作り出したと考えられる。従って、『舞姫』は「才子佳人小説」の要素の入った作品だと言える。それだけではなく、同時に中国の伝奇小説の性格をも併せ持っているのではないだろうか。

五、終わりに

以上、鷗外の旧蔵本『情史』への書き込みを手がかりに、「才子佳人小説」という話型に対する鷗外の理解を考察した。

臺灣大學學術

[11] 伝奇小説の特色として、世人を警戒させるために教訓、教化の意味が作品にある、という点が挙げられる（許麗芳「試論古典小説情節之虚実與論証特徴——以伝奇小説與短篇話本之対照為例」（『中山中文学刊』第二期、一九九六年六月、一頁））。

鷗外の『情史』への書き込みから、鷗外はとりわけ「才子佳人小説」に注目していたことが分かる。「才子佳人小説」でも特に関心があったのは、文才に優れた美男美女の間に生まれる純情で献身的な愛情表現と、恋に対する一途な、忠実な態度だと理解できる。『キタ・セクスアリス』での「僕」の感想と対応して、若き日の鷗外は才子佳人の深くて情熱的で、哀切激越とした恋愛感情を男女恋愛の理想だと考えたのではないか。そうした理解が創作に反映され、『舞姫』は「才子佳人小説」そのものとは言えないが、豊太郎の才子像も含め、『舞姫』には「才子佳人小説」と重なる部分が多々あると認められる。先行研究においては、「才子佳人小説」という概念への理解が日本的で、字面によるそれにとどまっている。しかし、鷗外は本来の中国古典文学における「才子佳人」の話型を正確に把握していたと言える。鷗外は同時に、自らの小説論で主張したように、『舞姫』において「特殊の面目ある各箇人の才子」を作り出したと考えられる。また、中国の伝奇小説の性格をも併せ持っていると考えられる。

従来、鷗外文学と「才子佳人小説」との関連についてあまり論究されたことがなかった。まして、奥野信太郎氏は「鷗外における中国文学の位置」(『群像』一九四八年七月)で、「鷗外と中国戯曲小説とは、さして深甚な関係のもとにあるものではない」と指摘している。しかし、本稿で検証してきたように、鷗外と中国古典小説との間に深い関わりがあることは明らかである。

臺灣大學學術期刊資料庫

＜付記＞本稿を草するに当たり、東京大学附属図書館より「鷗外文庫」閲覧の機会を賜ったことに御礼申し上げます。

参考文献

注で挙げたものはここで省略する。

「文献」（一次資料）

『情史類略』（馮猶龍先生原本、詹詹外史評輯、立本堂蔵板）

『鷗外全集』（岩波書店、一九七一年十一月～一九七五年六月）

森林太郎「現代諸家の小説論を読む」（1889）『柵草紙』第二号

「単行本」

（清）陳球（1901）『燕山外史』上海申昌書局、「鷗外文庫」

王夢鷗（1971）『唐人小説研究一纂異記与伝奇校釈』芸文印書館

汪辟疆（1975）『唐人小説』中華書局香港分局

詹詹外史（1982）『情史』広文書局

王夢鷗（1983）『唐人小説校釈』《上冊》正中書局

春風文芸出版社（1984）『明清小説論叢』第一輯

傅継馥（1984）『明清小説的思想与芸術』安徽人民出版社

林辰（1985）『才子佳人小説述林』春風文芸出版社

春風文芸出版社（1985）『明清小説論叢』第三輯

春風文芸出版社（1986）『明清小説論叢』第四輯

杜松柏（1987）『清詩話訪佚物編』（一）新文豊出版

平川祐弘（1987）『和魂洋才の系譜』河出書房新社

王先霈、周偉民（1988）『明清小説理論批評史』花城出版社

汪辟疆（1993）『唐人伝奇小説』文史哲出版社

千葉俊二（1997）『エリスのえくぼ』小沢書店

神田孝夫（2001）『比較文学論攷一鷗外・漢詩・西洋化』明治書院

「論文」

王瓊玲（1997）「駢文小説『燕山外史』研究」『世界新聞伝播学院人文学報』第六期

臺灣大學學術期刊資料庫

王瓊玲（1997）「丙編―《燕山外史》研究」『清代四大才学小説』台湾商務印書館
奥野信太郎（1922）「森先生と支那文学」『三田文学』
奥野信太郎（1948）「鷗外における中国文学の位置」『群像』許麗芳（1996）「試論古典小説情節之虚実與論証特徴―以伝奇小説與短篇話本之対照為例」『中山中文学刊』第二期
厳云受（1994）「《情史》論略」『学術界』第四十六期、安徽省出版総社、一九九四年第三期
笹淵友一（1970）「森鷗外とシナ近世文学」『明治大正文学の分析』明治書院
重松泰雄（1979）「「舞姫」再説―「特殊の面目」ある才子佳人の物語―」『文学論輯』
陳瑜（2002）「才子佳人小説婚恋観的文化透視」『首都師範大学学報』社会科学版、五十二期
潘知常（1968）「明末清初才子佳人小説的美学風貌」『社会科学輯刊』第四十七期
前田愛（1965）「鷗外の中国小説趣味」『国文学　言語と文芸』三十八号、大修館書店
丸田潤二郎（1936）「鷗外先生と支那学」『書物展望』
李神泉（1981）「唐人伝奇之興起及芸術特色」（『花蓮師専学報』十二巻、一九八一年六月）
劉慢卿（1974）「唐代之伝奇小説」『中華文化復興月刊』七巻六期
林淑丹（2002）「森鷗外『魚玄機』論――「才子佳人小説」を視点として」『人間文化研究年報』第二十五号、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

臺灣大學學術期刊資料庫